



1

**大重潤一郎**  
2015年7月22日  
死去

映画監督  
1946-2015  
「久高オデッセイ」  
三部作

沖縄の自然文化記録  
大重潤一郎氏 69歳 おおしげ・よしやち  
大重潤一郎氏は、22日午後4時41分、那覇市の病院で死去した。享年69歳。死因は不明。遺族は、お別れ会を7月28日（日）午後6時から、久高島で開く予定だ。

大重潤一郎氏は、1946年（昭和21年）に、沖縄県那覇市で生まれた。1964年（昭和39年）に、東京大学文学部を卒業した。1968年（昭和43年）に、NHKに入社し、1970年（昭和45年）に、NHK沖縄放送局に転任した。1971年（昭和46年）に、NHK沖縄放送局で、NHK沖縄放送局の番組制作に携わった。1973年（昭和48年）に、NHK沖縄放送局で、NHK沖縄放送局の番組制作に携わった。1974年（昭和49年）に、NHK沖縄放送局で、NHK沖縄放送局の番組制作に携わった。1975年（昭和50年）に、NHK沖縄放送局で、NHK沖縄放送局の番組制作に携わった。1976年（昭和51年）に、NHK沖縄放送局で、NHK沖縄放送局の番組制作に携わった。1977年（昭和52年）に、NHK沖縄放送局で、NHK沖縄放送局の番組制作に携わった。1978年（昭和53年）に、NHK沖縄放送局で、NHK沖縄放送局の番組制作に携わった。1979年（昭和54年）に、NHK沖縄放送局で、NHK沖縄放送局の番組制作に携わった。1980年（昭和55年）に、NHK沖縄放送局で、NHK沖縄放送局の番組制作に携わった。1981年（昭和56年）に、NHK沖縄放送局で、NHK沖縄放送局の番組制作に携わった。1982年（昭和57年）に、NHK沖縄放送局で、NHK沖縄放送局の番組制作に携わった。1983年（昭和58年）に、NHK沖縄放送局で、NHK沖縄放送局の番組制作に携わった。1984年（昭和59年）に、NHK沖縄放送局で、NHK沖縄放送局の番組制作に携わった。1985年（昭和60年）に、NHK沖縄放送局で、NHK沖縄放送局の番組制作に携わった。1986年（昭和61年）に、NHK沖縄放送局で、NHK沖縄放送局の番組制作に携わった。1987年（昭和62年）に、NHK沖縄放送局で、NHK沖縄放送局の番組制作に携わった。1988年（昭和63年）に、NHK沖縄放送局で、NHK沖縄放送局の番組制作に携わった。1989年（昭和64年）に、NHK沖縄放送局で、NHK沖縄放送局の番組制作に携わった。1990年（昭和65年）に、NHK沖縄放送局で、NHK沖縄放送局の番組制作に携わった。1991年（昭和66年）に、NHK沖縄放送局で、NHK沖縄放送局の番組制作に携わった。1992年（昭和67年）に、NHK沖縄放送局で、NHK沖縄放送局の番組制作に携わった。1993年（昭和68年）に、NHK沖縄放送局で、NHK沖縄放送局の番組制作に携わった。1994年（昭和69年）に、NHK沖縄放送局で、NHK沖縄放送局の番組制作に携わった。1995年（昭和70年）に、NHK沖縄放送局で、NHK沖縄放送局の番組制作に携わった。1996年（昭和71年）に、NHK沖縄放送局で、NHK沖縄放送局の番組制作に携わった。1997年（昭和72年）に、NHK沖縄放送局で、NHK沖縄放送局の番組制作に携わった。1998年（昭和73年）に、NHK沖縄放送局で、NHK沖縄放送局の番組制作に携わった。1999年（昭和74年）に、NHK沖縄放送局で、NHK沖縄放送局の番組制作に携わった。2000年（平成12年）に、NHK沖縄放送局で、NHK沖縄放送局の番組制作に携わった。2001年（平成13年）に、NHK沖縄放送局で、NHK沖縄放送局の番組制作に携わった。2002年（平成14年）に、NHK沖縄放送局で、NHK沖縄放送局の番組制作に携わった。2003年（平成15年）に、NHK沖縄放送局で、NHK沖縄放送局の番組制作に携わった。2004年（平成16年）に、NHK沖縄放送局で、NHK沖縄放送局の番組制作に携わった。2005年（平成17年）に、NHK沖縄放送局で、NHK沖縄放送局の番組制作に携わった。2006年（平成18年）に、NHK沖縄放送局で、NHK沖縄放送局の番組制作に携わった。2007年（平成19年）に、NHK沖縄放送局で、NHK沖縄放送局の番組制作に携わった。2008年（平成20年）に、NHK沖縄放送局で、NHK沖縄放送局の番組制作に携わった。2009年（平成21年）に、NHK沖縄放送局で、NHK沖縄放送局の番組制作に携わった。2010年（平成22年）に、NHK沖縄放送局で、NHK沖縄放送局の番組制作に携わった。2011年（平成23年）に、NHK沖縄放送局で、NHK沖縄放送局の番組制作に携わった。2012年（平成24年）に、NHK沖縄放送局で、NHK沖縄放送局の番組制作に携わった。2013年（平成25年）に、NHK沖縄放送局で、NHK沖縄放送局の番組制作に携わった。2014年（平成26年）に、NHK沖縄放送局で、NHK沖縄放送局の番組制作に携わった。2015年（平成27年）に、NHK沖縄放送局で、NHK沖縄放送局の番組制作に携わった。2016年（平成28年）に、NHK沖縄放送局で、NHK沖縄放送局の番組制作に携わった。2017年（平成29年）に、NHK沖縄放送局で、NHK沖縄放送局の番組制作に携わった。2018年（平成30年）に、NHK沖縄放送局で、NHK沖縄放送局の番組制作に携わった。2019年（令和元年）に、NHK沖縄放送局で、NHK沖縄放送局の番組制作に携わった。2020年（令和2年）に、NHK沖縄放送局で、NHK沖縄放送局の番組制作に携わった。2021年（令和3年）に、NHK沖縄放送局で、NHK沖縄放送局の番組制作に携わった。2022年（令和4年）に、NHK沖縄放送局で、NHK沖縄放送局の番組制作に携わった。

「久高オデッセイ」  
大重潤一郎さん死去  
映画監督 69歳

上から  
読売新聞  
琉球新報  
沖縄タイムズ

2

### 那覇赤十字病院での大重潤一郎監督の死

○2015年7月22日(水)15時50分、一人息子の大重生さん、「久高オデッセイ第一部風章」と「第二部生章」の助監督の沖縄大学准教授の須藤義人さん、「久高オデッセイ第三部 風章」助監督の比嘉真人さんのパートナーの伊豆有加さんとわたしの4人が見守る中、静かに大重潤一郎監督の呼吸が止まる。

○その後、30分ほど心臓は動いていた。那覇赤十字病院の主治医の豊見山医師が死亡を確認したのは16時41分。

○その場に、東京から駆けつけた大重映画のカメラマンの堀田泰寛さんを那覇空港に迎えに行っていた比嘉真人さん、神戸の坪谷令子さん、大阪出身の吉野千鶴さんが加わり、8名が大重監督の死亡確認に立ち会った。

○大重監督死去後5日後の7月27日、那覇市のサンレー豊崎紫雲閣で、「大重潤一郎さんを偲ぶ会」が開かれ、翌7月28日「お別れ会」が開かれた。

3

### 大重潤一郎主要作品

- 1970年:「黒神」自主作品
- 1972年:「龍勢一ナイキ反対住民連絡会」自主作品
- 1973年:「神の島」自主作品
- 1974年:「みすや針」販売テレビ
- 1975年:「本地師」販売テレビ
- 1977年:「AIZU HOLIDAY」(販売映画社/日本貿易振興会)
- 1986年:「水と風」建設省
- 1991年:「水の心」自主作品
- 1992年:「喪失の子供たちへ」日本ナショナルトラスト協会
- 1993年:「美奈」フジテレビジョン・関西テレビ放送
- 1994年:「証言集」フジテレビジョン・関西テレビ放送
- 1995年:「光の島」自主作品 (上条恒彦出演)
- 1996年:「風の島」自主作品 (大城実清出演)
- 2000年:「鶴文」海井県三方町鶴文博物館(海原益隆)
- 2001年:「原爆ニライカナイへー比嘉真人の島」自主作品 (比嘉真人出演)
- 2001年:「ビッグマウンテンへの道」自主作品(山尾三省朗談)
- 2002年:「大台ヶ原 気と水」(環境省・奈良県)
- 「小川プロ防衛記」(大島清・小川紳介出演、2003年 ベルリン国際映画祭正式招待)
- 2006年:「久高オデッセイ 第一部 結章」沖縄映像文化研究所
- 2009年:「久高オデッセイ 第二部 生章」沖縄映像文化研究所
- 2015年:「久高オデッセイ 第三部 風章」久高オデッセイ三部作製作実行委員会

4

### 「神の島」へ捧ぐ最終章

沖縄タイムズ 2015年1月9日朝刊

映画監督 大重潤一郎さん 68

余命1年 久高の日常撮影

「神の島」へ捧ぐ最終章

沖縄タイムズ 2015年1月9日朝刊

5

### 余命半年 銀幕に刻む神の島

朝日新聞 2015年7月4日朝刊 (亡くなる3週間前)

「余命半年」の記事

余命半年 銀幕に刻む神の島

朝日新聞 2015年7月4日朝刊 (亡くなる3週間前)

「余命半年」の記事

6

## 大重潤一郎 (1946年3月9日-2015年7月22日)

- 大重潤一郎は、1946年3月9日に鹿児島県鹿児島市天保山に生まれた。
- 10歳の時、病気で母を喪う。**
- 1961年、15歳、鹿児島県立甲南高校1年の時、1級先輩の宮内勝典の勧めで、初めて洋画を観る。
- それが、「**禁じられた遊び**」(ルネ・クレマン監督、1952年)であった。
- 「禁じられた遊び」とは、戦争で両親を喪った少女が行なう葛作り、無意識のうに行なっていた「喪の作業」であり、死者と生者の相互ケアであった。
- 大重潤一郎が生涯かけて行なっていたのも、そのような死生学的な相互ケアのいとなみであったのではないかと。
- 1995年11月に完成した大重中期の重要作『光りの島』では、10歳で病気により「死んだら何にもならんもんね」と言残して若くして亡くなった母の言葉が反芻され、生きるとは、死ぬとは何かが無人数島の島とのセルフケア的対話の中で確かめられていく。
- これは、神戸で阪神淡路大震災を体験した大重の生と死をめぐる魂の問いであり、「魂の世話」(ソクラテス)であった。その問いがますます、『原郷ニライカナイ〜比嘉康夫の魂』と『久高オデッセイ』三部作につながっている。今回の沖縄大会の学会のテーマ「生と死とスピリチュアルケア」に即して検討したい。

7

## 1995年1月17日の大重潤一郎

- 1995年、阪神淡路大震災が起きた当時、大重潤一郎は神戸に住んで、大阪の天満に事務所を構えていた。
- その日その時刻、大重は大阪の事務所にいた。もちろん、大阪でも激しい揺れだったが、「海プロダクション」の事務所の建物の倒壊はなかった。
- 急ぎ、神戸の自宅に向かった。が、電車が途中から動かない。そこで、電車を降り、神戸に向かつて歩いた。
- 高速道路がへし折れ、ビルも民家も倒壊し、粉塵が上がり、どこもかしこも無秩序な瓦解した世界。それは黙示録的な終末世界のようなだった。
- 大重は、その中を歩いて、神戸市中央区北野のわが家まで帰った。
- それからはしばらく、妻や息子と避難所暮らしをした。妻は脳梗塞を起した。
- その阪神淡路大震災を体験して、その夏、大重は猛然と『光りの島』の編集に取りかかり、完成させた。
- 震災で廃墟ようになったアスファルトからタンポポが芽を吹き出す。花好きの大重は、そのタンポポを見逃さなかった。この地面の下には、縄文時代から続いているいのちが埋蔵されている。大重の野生の感覚、生命感覚はそう告げた。それを取り戻すのだ!

8

## 大重潤一郎「光りの島」(1995年夏製作)

- 幼い時に母を亡くした主人公は、母が生前もらしたという「人間死んだらなんにもならん、つまらんものね」の一言を抱いて旅を続ける。
- そしてようやく亜熱帯の珊瑚礁の無人島と出会う。
- その島の磁力にひきよせられるように魂の道草を始める。
- やがて見えないものに眼を向け、聞こえない音に耳をかたむけ始めた主人公に、島の自然は応え、語り始める。
- 阪神大震災を身を以て経験した監督・大重潤一郎が、祈りと希望を託して編集し、作り上げた生命の根源を問う映画 (1995年製作)  
「光りの島」you tube:<https://www.youtube.com/watch?v=ScKteVBoeFI>
- 「我が魂の道草に応えてくれたこの小さな島はすでにその姿を失っている。開発によって島の様子が一変し、原形をとどめるのは海岸線のみとなった。しかし島が教えてくれたことは永遠のものである。  
やがて何百年かあとには島はもとの姿をとりもどすと確信する。」

9

## 「いのちの根源」としての「母の声」

- 主演(出演者はただひとり)の上條恒彦がアラグスク島(新城島)に入っていく。
- そしてこの島の光と風に晒され、見えないモノを視、聴こえない声を聴き、「いのちの帰趨」に触れていく。
- 「光り」に満ち溢れてはいるが、人には満ち溢れていない。
- 無人島の寂しい島。
- その島に渡った「わたし」は、「いのちの根源」である「母の声」を反芻する。

10

- 「光りの島」は大重にとって、廃墟となった神戸と裏表になり、つながっている。「光り」といえばボジだが、しかし、「光りの島」は無人島で、その意味ではネガともいえる。新城(アラグスク)島という沖縄県八重山諸島の石垣島の向かいにある無人島。

- その島に、わたしも2度渡ったことがある。一度は石の聖地の写真家の須田郡司さんと。入島する前に、二人で禪一丁になって禪をして入った。二度目はアカマタ・クロマタの祭りの日に佐藤善五郎さんに案内されて渡った。この祭りの日に喜納昌吉さんも来ていた。

- 主演(出演者はただひとり)の上條恒彦がアラグスク島に入っていく。そしてこの島の光と風に晒され、見えないモノを視、聴こえない声を聴き、「いのちの帰趨」に触れていく。

- 「光り」に満ち溢れてはいるが、人は満ち溢れていない。無人島の寂しい島。その島に渡った「わたし」は、「いのちの根源」である「母の声」を反芻する。

11

## 「光りの島」(1995年)と「久高オデッセイ第三部風章」(2015年、遺作)

- 母は死の間際に、「死んだらなんにもならん、とつぶやいた。
- 島を訪れてきた主人公(独演：上條恒彦)は、その「死んだらなんにもならん」という母の言葉を反芻し、問いかける。そして終に、次のような「いのち」観に到達する。
- 「母さん、そうじゃなかったでしょう。『死んだらなんにもならん。』なんて。死んでも生きていますでしょう。生きる姿は変わってしまったけれど。しかし、母さんがどうしているか分かって良かった。母さんよかったですね。」
- 大重潤一郎の遺作となった『久高オデッセイ第三部 風章』においても、自然といのちの帰趨が言葉ではなく、映像で悠久の時間を紡ぐように示されているが、この「光りの島」の中でも同様に主人公は次のように語る。
- 「この島の自然に始まりも終わりもない。くりかえしがあるだけじゃないか。地球は生命のゆりかごであるという。しかしそれは生み出すだけではない。死をもひきとっている。そして眼には見えない。耳には聞こえないちがう次元へ導き、計り知れないいのちを生かしている。生も死も全てを包み込んで大きなうねりをくりかえしている。」
- 「全てが生きている。祖先や様々な霊たちが石の像(かたち)を借りて唄っている。」

12

### 「沖縄を記録すること：ペインとケアの相互作用 ～大重潤一郎の映画とケアの心」

- 当事者ではないものが沖縄を記録することは大変難しい。対象とするものを前にしてさまざまなレベルで「痛み(ペイン)」を感じ、記録することや表現することの葛藤やジレンマに苦むことになるからだ。
- そうした、「痛み」とのケアの相互作用する事例として、沖縄を舞台にした映画『光りの島』(1995年制作)、『風の島』(1996年)や『原郷ニライカナイへ～比嘉康夫の魂』(2001年)、『久高オデッセイ』三部作(2006年-2015年)がある。
- なお、『久高オデッセイ第一部 結(ゆい)章』『第二部 生章』の助監督は、須藤義人さん、『第三部 風章』の助監督は、比嘉真人さん、である。

13

### 記録することの痛みと癒し

- 記録することの痛みと癒し～ケア的関係性  
一言では語れない複層している沖縄の痛み  
～支配・侵略・暴力・戦争・差別・抑圧  
江戸時代の薩摩による支配  
近代日本帝国による支配  
敗戦後のアメリカ(米国)による支配  
そして、本土復帰後の支配  
この複雑な多重支配と痛み
- 石牟礼道子の『苦海浄土』は、「浄瑠璃のような語り」記録と癒し
- 「光りの島」と「久高(島)オデッセイ」というくものがたり>セルフケアと共同体ケア～なぜ「オデッセイ」か？

14

### 『苦海浄土』あとがき

(講談社文庫、360頁、1968年12月21日未明)

- 「意識の故郷であれ、実在の故郷であれ、今日この国の棄民政策の刻印をうけて潜在スクラップ化している部分を持たない都市、農漁村があるであろうか。このような意識のネガを風土の水に漬けながら、心情の出郷を遂げざるを得なかった者たちにとって、故郷とは、もはやあの、**出奔した切ない未来**である。
- 地方に出てゆく者と、居ながらにして出郷を遂げざるを得ないものとの等距離に身を置きあうことができれば、わたしたちは故郷を再び媒体にして、民衆の心情とともに、おぼろげな抽象世界である未来を、共有できそうにおもう。その密度の中に彼らの唄があり、**私たちの詩(ポエム)**もあろうというものだ。そこで私たちの作業を記録主義とよぶことにする。」

15

### 改稿に当たって〔旧版文庫版あとがき〕

(講談社文庫、362頁、1972年11月9日)

- 「白状すればこの作品は、**誰よりも自分自身に語り聞かせる、浄瑠璃のごときもの**、である。
- このような悲劇に材をもとめるかぎり、それはすなわち作者の悲劇でもあることは因果応報で、第二部、第三部執筆半ばにして左眼をうしない、他のテーマのこともあって、予定の第四部まで、残りの視力が保てるか心もなくなった。視力より気力の力がじつはもっと心もとないのである。」
- 大重潤一郎さんも、第一部制作途中で、脳内出血となり、右半身の機能を失った。
- また、第二部制作途中で、肝臓がんとなり、最終的に、肝臓がんの手術を17回受けることになり、死に至った。

16

### 「井戸」(石牟礼道子)と「地下水脈」(大重潤一郎)

「与那国や久高島の珊瑚礁は、山と海が生成されつつある頃のドラマをとどめていた。隆起した珊瑚礁のくぼみが、満ち干きする潮に洗われながら、清水の湧く泉をつくり出した頃、ヒトはもう生まれたいのだろうか。その泉をヤグルイと名づけて神の井戸とした者が久高人であるならば、わたしもまた久高の人になれるのだと微笑まれた。わたしの村の「神の位を持つ井戸」を思い出しながら、やっぱり潮によってわたしも運ばれて来たのだったと、岩に付着している貝をみながら想う。海の泡やら貝から生まれたという神話はほんとうなのだ。

不知火海はわたしの心の内部だった。そしてまたわたしは潮を抱いている島ともいえる。いまひとつの島があれば、それを自分に重ねて見たかった。往き来る潮によって形造られた初原の生命であれば、樹でも石でもよかった。言葉はヒトを憑り代にするまえに、光や闇や、樹や石などに宿っていた苦だから。

このようなときの心の選択をなんと呼べばよいのだろう。不知火海の渚にみられるアコウの巨木の気根が、わたしの旅への辻占だった。深夜の遠い雷鳴と自分の髪が呼応しあうように、わたしはまだ見ぬガジュマルにひきつけられていた。南島の古謡は、わたしの中ではもう長い間、星のちりばめられた夜の闇で、まだ見ぬガジュマルたちが歌っているのである。(中略)

17

### わたしの欲している歌とは、 そのとき聴こえる水の声のようなものである。

身元もしれぬ神々の死が、あの辱められながら死んだ神々が、久高島にいるわたしに憑いていた。世にいれられぬ者たちの苦しみを選んで、最後の神が、あのひとたちに宿っていたのだが。

ヤマトの中の未詳の神とは、よるべく生き残る者たちへ、死んでゆく受難者たちが残すまぼろしなのであろうか。まぼろしならばなおのこと、それを視たいとわたしは思っていた。

わたしの欲している歌とは、そのとき聴こえる水の声のようなものである。共に苦しむ神がいるとして、ではその神の死はどのようにうたわれるのか。はじめすこやかな者に乘たり給うた神の歌歌を、尊敬せねばならぬと、わたしはおもっていた。

久高島のイザイホウが、わたしの宇宙の円心の中で展開されつつあった。どうやってここまで来たのであつたらう。「陽のかなしみ」『石牟礼道子全集』第6巻、233-234頁、1979年)

18

## 「暗河」と久高島の「イザイホウ」

「南島の、宮古や八重山あたりの島々にゆけば、暗河(くらごう)とよばれる地底の川があるという。泉であるというふうにも聞いている。

そこは聖域で、地上から降りる階がついてあり、島の女性たちが水桶を頭上に乗せ、腰で調和を取りながらゆったりと飲み水を運び、洗いのをしりするのだとも聞いた。

すこしおもむきはちがうが、わたしの育った不知火海沿岸でも、磯の根元にある泉や、谿の間の湧水口を、神の居る場所として畏れうやまい、じつに大切に扱っていた。足もとを洗う冷気と清浄さに、幼児の頃から心ひかれてやまぬ場所であったが、磯辺の泉はおおた水銀の底となった。

泉をおおっていた守り神の巨樹たち、あの大杉も、大榎も、大樟も、アコウの巨木も立ち枯れ、あるいは伐られてしまったのである。塞がれた泉の音がわたしに訊ねる。

**もと来た命の遠い源、湖と水の溝く遠いところ、もと来た泉**はどこであったらうと。

訊ねられたわたしは、もう永い間、**塞がれた泉の心**になっていて、はるかな泉の湧き音を、聞きとらえたいと念じ続けていた。

19

## 女性祭祀を柱にした生活と文化の原理

わたしの感じた方向というのは、太平洋と東シナ海の湧けあうところにある島々だった。そこに湧く泉にまで辿りつくことが出来れば、最初に見た樹を神にしよう。その樹はたぶん、潮と砂に根ざして立っている、アコウの樹にもえる。わたしは訊ねたい。この世は、どうやら、自分を創りそこねつつあるのではないのでしょうか。

もしもひと粒の泡沫となって、太古の方へ生まれ直すことが出来るとすれば、原初の暁は、どんな色であったろう。満ち始めている潮と、陸の間に漂っていて、まだ生まれかねている能末のような気分だった。(中略)

たとえば、沖縄の歴史・文化の形は大和のそれにくらべて、およそ八世紀ぐらいの落差を持っているのだと諸書はいう。ところでわたしは、その落差、後期封建制や近世のようなものが抜け落ちているとされる、沖縄自身の歴史の必然とその結実をたいそう価値あるものにおもう。

何よりもまず、**女性祭祀を柱にした生活と文化の原理**がここに息づいていて、ことが有難い。女性上位とやらを見つけて去い立てるつもりではなく、女性という自然が、望ましい開花に達して生を終えることが、ここで見てとれるからである。それはまた男性たちとの関係の持ち方への示唆をも含んでいる。

20

## 神歌の世界

久高島のイザイホウ神事にもっとも象徴されることだが、この祭式儀礼のひろがり、厚みを持った豊饒さと、圧倒的気品を見れば、人間性を損なうことのない社会の成り立ちに、思いを致さずにはいられない。

離島であるがゆえの痛苦の歴史も、沖縄の精神は澄明に内面化していることが、行きずりに垣間みる人々の面ざしやたずまいからも見てとれる。(中略)

ここにはいまだなお、**歌いだされぬ神歌の世界**が蔵されているのだと、そのときわたしは思った。この場のやりとりは、はしなくも久高島の**精神世界の日常**を垣間みせてくれたのだった。樹木や葎を崇(たか)へる神女、それらに命名する神女たちは、水俣にも多くいたのである。彼女らは現代の中に流竄する者として、たぶん選び取られたのであったろうか。その、無言の促しによって、ここに来たのだという想いが深くあった。

釣竿を持った人は、久高の秘儀のはじまる前の暗示的な登壇者、能ていうワキツレのような後姿をみせて、浜辺へ下りて行った。

その人の短い台詞は、島の秘祭に参加しようとする外来者に対して、問いかけの意味を持っていた。南島の古歌謡は、神と人が交しあう対句によってうたい継がれて来たという。今わたしは、うたいかけられたのではあるまいか。わたしの言葉も生まれたくて、夕暮れ色に染まった。風の音がして阿豆の森が響った。(中略)

釣竿を持った人が通って住ったあと、「神人のあの人」たちの行き交う陽の道と、闇の道の匂いを嗅いだように思った。

21

## 久高島の最古の聖泉「ヤグルガー」

天に向けて架かっている道は、そのまま海への続いていた。つまりそこから先は崖になっていて、珊瑚礁の岩を伝って下れば、**この島の最古の聖泉、ヤグルガーへの磯道**になる。わたしたちは崖を伝って、岩礁につけられた細い道に立った。潮の飛沫が、磯につく岩を越えてうなじにかかる。珊瑚礁のくぼみや亀裂に、名も知らぬ白い可憐な花がつつれ映っていた。ヤグルガーはさらに下って、潮のとどろき寄せる音の中にあつた。岩の間のわずかな湧き水をわたしは視た。

その懐かしい泉は、**水の少ない島の、祈る心の切実さ**をよくあらわしていた。(中略) そのあと神助たちは、外間御殿の庭に集まって優美な神歌をうたいながら、全儀式の中で、それだけがたったひとつの華麗な唐扇を、蝶(はへる)たちの羽根のやすらぐ時のようにひらいて舞った。すべての経過の中で、彼女らははだだった。白衣の裾の下の素足が、地に降り立つもの力であった。

午前中の花さし遊びののち、神女たちがイザイ山に去ったあとの御殿庭(うどんみやあに)、黒い揚げ羽蝶と白黄色の蝶が、イザイ山から出て来てしばらく舞った。双つの蝶はおもろの対音のように、高くなったり低くなったりして舞い交した。新しく生まれたナンチュウたちの所へ、神はまだ滞在しているのだろうか。やがてまた双つの蝶はイザイ山に帰った。人影のない御殿庭を声もなく囲んで立っていた者たちは、玄妙な時間の中に置かれた。」(「海のおもろ」全6、258頁、1986年)

22

## 『原郷ニライカナイ～比嘉康雄の魂』(2001年、60分)

○ 沖縄を代表するカメラマンであり民俗学者の比嘉康雄さんの遺言を記録した映画『原郷ニライカナイ～比嘉康雄の魂』

○ 亡くなる3週間前の比嘉康雄さんから名指しでダイレクトに大重潤一郎に、「大重さん、俺の遺言を撮ってくれ」というオファーがなければ、「久高オデッセイ」三部作も生まれなかった。

○ 比嘉康雄さんはなぜ人生の最期に鹿児島県鹿児島市天保山生まれの大重潤一郎に遺言を託したのか？

○ その比嘉康雄さんの遺言は大重さんの心を打ち破り、魂まで届き、大重さんの体を久高島まで運ばせ、そこで濃密な12年間を過ごさせることになった。

○ 大重潤一郎は、比嘉康雄さんの遺言に触れることがなかったら、まったく違う人生を歩んでいただろう。

○ その頃、大重は、福井県三方市に新設される縄文博物館の常設展示用の映像「縄文」を最終編集する段階だった。夜を徹してでも納期までに作品を収めなければならない、そんなせっぱつまった時に、比嘉康雄さんからダイレクトコールがあった。何は差し置いてもしそれに向き合わねばならない。大重は、比嘉さんからの要請を真正面から受けとめた。

23

## 縁

○ 実は、大重がその電話を受けた翌日に、わたしは声屋で大重潤一郎と精神科医の加藤清先生に会って会食していた。大重は、大変興奮して、比嘉さんからの電話のことを熱く語ってくれ、翌日、スタッフには行き先何も言わずに沖縄に向かった。

○ そして比嘉さんと一緒に久高島に渡り、比嘉さんの自宅で「遺言」を聴き取った。久高島は尚氏王朝時代から「神の島」として尊崇されてきた特別の島。比嘉さんはその久高島のことを研究誌記録し、亡くなる直前に久高島の本を出した。

○ 『日本人の魂の原郷 沖縄久高島』(集英社新書、2000年)。

○ 死を目前にした比嘉康雄は、思いのたけを語った。その「遺言」は大重の心を打ち抜き、魂に届き、終には大重の体を久高島まで運ばせ、そこで死ぬまでの濃密な12年間を過ごさせることになった。

○ 比嘉さんからの1本の「いのちの電話」と「遺言」の力は絶大なものがあつた。

○ 2006年に完成した「久高オデッセイ第一部 結章」は、大重潤一郎の一人息子の 大重生さんと須藤義人さんが助監督となって懸命に支え、完成にこぎつけた。

○ それを、島岡進さんが実行委員長を務めた「国際宗教学宗教史学会」で初上映し、シンポジウムも行った。

○ その「縁」が、今日のこの発表にまでつながっている。

24

### この世とは「風が吹いているところ」(大重語録)

- 次の発表者の石野真輔さんたちが、「久高オデッセイ第三部 風章」を上映してくれた、大阪・梅田の大変ユニークなライブ喫茶「JUN」のオーナーが、大重映画の「縄文」(2000年製作)の主役のJUNアメントさんです。
- その天人(あまんと)JUNさんは、大重潤一郎との最後の会話が次のようだったと明かしてくれました。
- <あの世に行って閻魔大王に会って、「この世はどんなところだったか？」と訊かれたら、「そこには風が吹いていました」と答えるよ。>
- 大重潤一郎にとって、この世とは、「風が吹いているところ」、だった。
- その「風」は、「夢」であり、「愛」であり、「希望」であり、「苦悩」であり「痛み」であったのかもしれない。
- その「風」に吹かれて、大重潤一郎は、生死の境を旅していったのでした。

25

### 「光りの島」はもちろんですが、この大重潤一郎監督の記録映画「久高オデッセイ」三部作も、ともに、

まさしく、

- 「グリーフケア」
- 「スピリチュアルケア」

の映画ではないでしょうか？

26



27



28



29




30

**大重潤一郎への追悼文**

- 2015年11月27日
- 「琉球新報」

**論壇**



大重 潤一郎

二 東田 雄二

大重潤一郎（1926年10月14日～2015年11月27日）は、琉球新報の記者として、戦後から戦前まで、琉球の歴史を伝えることに尽力した。その功績は、琉球の歴史を伝える上で、重要な役割を果たした。この功績を、追悼文として、ここに記す。

大重潤一郎は、戦後から戦前まで、琉球の歴史を伝えることに尽力した。その功績は、琉球の歴史を伝える上で、重要な役割を果たした。この功績を、追悼文として、ここに記す。

大重潤一郎は、戦後から戦前まで、琉球の歴史を伝えることに尽力した。その功績は、琉球の歴史を伝える上で、重要な役割を果たした。この功績を、追悼文として、ここに記す。

- 「久高オデッセイ第一部 結章」  
男性神役ソールレイガ  
ナシーとの退任
- 「久高オデッセイ第二部 生章」  
神女の退任
- 「久高オデッセイ第三部 風章」  
あらたないのちいぶき